

第七十四回

瀬戸市文芸発表会

俳句部門 特選・入選作品

俳句

【田口 風子 先生選】

『一般の部 特選』

若葉風入れて開店レストラン
新茶汲む瀬戸の急須に招き猫
仙人掌の花や馴染みの理髪店

『一般の部 入選』

早春の風入る窓絵付小屋
新米を積んで父親ひょいと来る
鮫鱗の口に値札や朝の市
万縁や新任教師声高く
病床の妻の待ちたる四葩咲く
塩舐めて男炎暑の窯焚けり
夫といて栗剥く夜の静かなり
白杖の止まりて仰ぐ花火かな

『小中学生の部 特選』

つぼみからふわり飛び出す春の夢
紫陽花とぼたぼたという雨の音
名古屋に夏連れてくるのはお相撲さん

幡山中学校三年
幡山中学校二年
聖霊中学校三年

井上 柏植 西岡 果南
伊藤 真由美 伊藤 董花 近江 俊郎
富基恵 富基恵 岡田 善道 岡田 善道
掛樋 岡田 善道 岩田 孝道 岩田 孝道
加藤 岩田 孝道 岩田 孝道 岩田 孝道
嗣征 岩田 孝道 春海 美智男 春海 美智男
白瀬 美智男 武田 稜子 野津 洋子 山内 真弓
春海 美智男 武田 稜子 野津 洋子 山内 真弓
岩田 孝道 岩田 孝道 岩田 孝道 岩田 孝道
岩田 孝道 岩田 孝道 岩田 孝道 岩田 孝道
瀬戸市八幡台 埼玉県久喜市 瀬戸市品野町 瀬戸市西本町 福島県いわき市
瀬戸市城屋敷町 瀬戸市白山町 瀬戸市西松山町

『小中学生の部』 入選

弟に手を引かれては川涼み

かき氷どのシロップをかけようか

満月がずっとこちらを覗きけり

溶けて行く儘き二つの雪たるま

音もなく銀木犀が散ってゆく

青い海足跡残して海が消す
夕焼けは染まつていなか水

青い海足跡残して海が消す
コンクールみんなと合わせた最後の夏

風が吹きさらりとなびく春の日
真夏の日街を歩けば影がある

幡山中学校三年
幡山中学校三年
幡山中学校三年
幡山中学校三年
幡山中学校三年
幡山中学校三年
幡山中学校三年

又吉廣國橋本田端田中澤村黒野笠井稻垣伊藤
想絢子涼亞輝爽楓子ガヴィン凌煌実玲藍生

『一般の部』

若葉風入れて開店レストラン

新しいお店を開く時は希望に満ち溢れていことだろうし、またお客様が来てくれるのか心配もあることだろう。だが今日の開店日はすっきりと晴れてお店の中には若葉

風が吹き抜けてゆく。このお店の開店を若葉風が祝福しているような、店主にも客にもわくわくとした華やぎを若葉風に集約させている。

新茶汲む瀬戸の急須に招き猫

瀬戸の街を歩くと、ほとんどの店先に招き猫が飾られているのを見かけます。瀬戸は日本で最初に陶磁器による招き猫の工業生産を始めたと言われ、最近ではいろいろなユニークな招き猫も見ることが出来ます。右手を上げていれば「金運」、左手を上げていれば「人」「客」を招くといい、それぞれの願いの招き猫を選ぶのも瀬戸の街を歩く楽しみの一つです。

新茶を汲む急須の招き猫は、さてどちらの手を上げているのでしょうか。

仙人掌の花や馴染みの理髪店

最近は男性でも美容院に行くらしく「理髪店」がめつきり少くなりました。昔は近所の理髪店はどの子の髪も切りながら、成長も見守つてくれていたようです。馴染みの理髪店、きっと座れば何も言わなくとも思うように仕上げてくれるのでしょうか。

『中小学生の部』

つぼみからふわり飛び出す春の夢
咲き切った花でなく「つぼみ」から飛び出す「春の夢」、それも「ふわり」と。大きすぎる夢でなく、少し手を伸ばせば届きそうな「夢」であるように思わせてくれるところに共感しました。

紫陽花とぽたぽたという雨の音

「紫陽花」と「雨」の取り合わせの句はたくさんあります。が、「ぽたぽた」と雨の音を表現したところに新味があります。

名古屋に夏連れてくるのはお相撲さん
七月は名古屋場所。お相撲さんを名古屋で見かけるようになると、名古屋の夏も本番の暑さです。

【佐藤 美恵子 先生選】

『一般の部 特選』

早春の風入る窓絵付小屋

秋晴れや徐々に荷をとく陶器市
十葉の匂ひ北里博士墓所

瀬戸市八幡台
埼玉県さいたま市
東京都狛江市

『一般の部 入選』

ひこばゆる切り株が台おままごと
天も地も無限の闇や秋ほたる
新米を積んで父親ひよいと来る
さざ波の光を蹴つてあめんぼう
鮫鰯の口に値札や朝の市
食器洗う小さな手ありキャンプ村
ごきぶりの三億年の黒光り
窯出しの男衆囮むさんま飯
白杖の止まりて仰ぐ花火かな

『小中学生の部 特選』

音もなく銀木犀が散つてゆく
春風にノートひらいて夢つづる
美味しいねみんなで食べるお雑煮は

幡山中学校三年
光陵中学校二年
幡山中学校三年

下津澤村
姫心楓子
廣國絢子

瀬戸市川西町
大阪府高槻市
埼玉県久喜市
瀬戸市萩山台
瀬戸市品野町
北海道江別市
東京都練馬区
瀬戸市城屋敷町
瀬戸市西松山町

井上美智子
打浪紘一
岡田孝道
小栗敏男
掛樋嗣征
北澤多喜雄
鈴木英晴
武田稜子
山内真弓

瀬戸市八幡台
埼玉県さいたま市
東京都狛江市

安藤
関根

富基恵
誠二

『小中学生の部 入選』

万博で世界夢見る夏休み
弟に手を引かれては川涼み

かき氷どのシロップをかけようか

悴んだ手でペン握り震えた字

帰り道水着と足が重くなる

夜空裂く音も鮮やか花火かな

夕焼けに染まつていった水平線

心地よく夜に聞こゆる夏の雨

グラウンドに弾むボールと光る汗

雲のすき一瞬ひかる流れ星

関市立桜ヶ丘中学校二年

幡山中学校三年

幡山中学校一年

幡山中学校三年

幡山中学校三年

幡山中学校三年

幡山中学校三年

幡山中学校三年

幡山中学校二年

市村 優成
伊藤 藍生
稻垣 實玲
井上 澄
桂川 翔太
河野 琨空
田中 爽
中島 海翔
松本 詩織

選後評

佐藤 美恵子

『一般の部』

早春の風入る窓絵付小屋

絵付は素焼きをしたものや本焼きをした後の陶磁器などに絵や模様を描く工程のひとつ。季節は早春。ようやく春の気配が漂う中、少し開けた窓から入る風は凜として、心が引き締まるようです。並べられた絵付の皿に色彩あふれる小屋の匂いと熱気。そこに早春の息吹が加わり、まさに美しい器が生まれる瞬間を思われます。

秋晴れや徐々に荷をとく陶器市

澄んだ秋の青空のもと、陶器市の準備が始まるところ。店を開くために、運び込まれたひとつひとつの陶器の包みが丁寧に解かれていきます。「徐々に」の措辞によつて、大切に扱われる陶器のかたちや大きさや風合などを想像させ、活気ある陶器市がこれから開催されることを伺わせて、楽しい一句です。

十薬の匂ひ北里博士墓所

北里博士は昨年発行された新紙幣の肖像にもなった北里柴三郎博士のこと。ドイツ留学中に破傷風の血清療法を発

見し、帰国後ペストの流行に際してはペスト菌を発見、私立の北里研究所を設立して、終生伝染病研究に尽くしました。墓は東京の青山墓地にあります。十薬はドクダミのこととで古くからの民間薬。繁殖力が強く、独特的の匂いがあります。博士の徳を慕うかのように咲いているのでしょうか。

『中小学生の部』

音もなく銀木犀が散つてゆく

銀木犀は金木犀と比べて、花も地味で匂いも控えめです。「音もなく」散る秋の静けさに気づく纖細な感覚の作品です。

春風にノートひらいて夢つづる

春風を受けて、ノートにつづる夢のひとつひとつがふくらんでいく思いがします。

美味しいねみんなで食べるお雑煮は 新年に家族が揃つてお雑煮を食べる喜びが素直に話しか けられています。それを聞いた家族もしみじみと幸せなお

正月です。

【加藤 かな文 先生選】

『一般の部 特選』

花は葉に故郷こんなにも青い
鮫鱗の口に値札や朝の市
秋晴れや徐々に荷をとく陶器市

愛知県一宮市
瀬戸市品野町
埼玉県さいたま市

『一般の部 入選』

夕立が助走をとりはじめている
新米を積んで父親ひよいと来る
露けしや病臥の父の無精髭
恐竜の顔して守宮蛾を襲ふ
自由席片道切符着膨れて
春愁のたまごボーロはうす甘し
仙人掌の花や馴染みの理髪店
夏掛の一回りして朝がくる
赤蜻蛉大事なことは二回言ふ

東京都渋谷区
埼玉県久喜市
茨城県水戸市
佐賀県唐津市
神奈川県平塚市
愛知県春日井市
東京都大田区
瀬戸市東桜戸町
名古屋市中区

市橋 富士美
掛樋 嗣征
関根 一雄

芦田 晋作
岡田 孝道
久信田 史夫

古賀 由美子
しらが式部

福代 法子
右田 俊郎
水谷 房枝
亘 航希

『小中学生の部 特選』

ぶかぶかとあおにゆられるくらげかな
帰り道水着と足が重くなる
授業中机に伏せて風薰る

幡山中学校三年
幡山中学校三年
幡山中学校三年

市原 富士美
桂川 嗣征
和田 一雄
翠 一雄
翔太 富士美
愛桜 嗣征

『小中学生の部
入選』

満月がずっとこちらを覗きけり
ただ暑いプールサイドの見学者
炎天下駆ける先には自己ベスト
焼き芋の屋台が通り追いかける
作文は最後に回そう夏休み
紫陽花とぼたぼたという雨の音
見上げれば入道雲に空の国
祖父の畑いきなり現るズツキーニ
明けました親戚たちとおめでとう

白井 笠井 近藤 嶋田 烏
清暖 まや 柚季
渡邊 西岡 富田 枝植 濱戸内
海 愛菜 悠聖 彪臣 瞳

『一般の部』

俳句らしい俳句のよさ。俳句らしくない俳句のよさ。どちらも読者をはつとさせます。今回、その両方を感じながら選考することができました。感謝いたします。

・花は葉に故郷こんなにも青い

海の青きか、それとも空の。〈故郷こんなにも青い〉は作者の思いを述べたにすぎません。しかし風景を呼び寄せる強い力があります。俳句らしくない俳句のよさを感じました。

・鮫鱗の口に値札や朝の市

開いた口に値札が差してある。誰もが目にしながら素通りしていた光景ではないでしょうか。こうしてその部分だけクローズアップされると、正に〈鮫鱗〉らしさはそこにこそあると感じられます。俳句らしい俳句。

・秋晴れや徐々に荷をとく陶器市

リアリティを強く感じました。〈秋晴れ〉の下の〈陶器市〉らしさが〈徐々に〉の一語で的確に表現されています。俳句らしい俳句。

『中小学生の部』

ご応募ありがとうございます。きやつきやつとふざけ合ひながら、あるいは少し背伸びしながら課題に取り組む子どもたちの姿が目に浮かびました。先生方のご指導に感謝いたします。これからも「俳句とは季語を一つだけ入れた五七五」の説明をしてあげてください。来年もよろしくお願いします。

- ・ぶかぶかとあおにゆられるくらげかな
- ・帰り道水着と足が重くなる
- ・授業中机に伏せて風薰る

一句目。季語は〈くらげ〉(夏)。海を意味すると思われる〈あお〉という言葉に驚きました。言葉の感覚がすばらしい。二句目。季語は〈水着〉(夏)。泳いだとのけだるさが〈水着と足〉の重さに表現されています。気持ちを述べずに物だけで表現する、きわめて俳句らしい俳句です。三句目。季語は〈風薰る〉(夏)。学校生活の中で誰もが体験する場面。その一瞬を巧みに切り取りました。

【横田 欣子 先生選】

『一般の部 特選』

行き過ぎて踵を返す忘れ花
黙々と轆轤軋ます油照
補聴器に突と飛び込む初音かな

『一般の部 入選』

さざ波の光を蹴つてあめんぼう
食器洗う小さな手ありキャンプ村
湯治湯の話筒抜け稻の花
猛暑日や風の読点夕まぐれ
塩舐めて男炎暑の窯焚けり
目一杯積み上ぐる窯場かな
ひと荒れの空を宥める八重桜
ふるさとの祭に搜す友の顔
白杖の止まりて仰ぐ花火かな

『小中学生の部 特選』

炎天がグラスの氷輝かす
つぼみからふわり飛び出す春の夢
帰り道水着と足が重くなる

瀬戸市西本町
東京都目黒区
瀬戸市東拝戸町

加藤 春海
清水 吉明
水谷 房枝

瀬戸市萩山台
北海道江別市
茨城県水戸市
愛知県刈谷市

小栗 敏男
北澤 多喜雄
久信田 史夫
鈴木 哲

瀬戸市城屋敷町
愛知県知多郡武豊町
長野県安曇野市
奈良県奈良市
瀬戸市西松山町

武田 稔子
鳴海 浅葱
穂苅 真泉
堀ノ内 和夫
山内 真弓

幡山中学校三年
幡山中学校二年
幡山中学校三年

磯村 心美
井上 愛海
桂川 翔太

『小中学生の部』
入選

公園でみんなと取り合う夏木立
万博で世界夢見る夏休み

弟に手を引かれては川涼み

まだ見えぬ不安かき消す青嵐
文：開　鷺の言判しき

友と聞く鶯の声別れかな
旦々、英二一瞬で云ふ夏木

早く来て一瞬で去る夏休み

夜空裂く音も鮮やか花火かな
向日葵三歳の返るそび見つめ

向田葵と振り返るたび見つめ合う
名古屋こ夏連れてくるのはお相撲さん

雲のすき一瞬ひかる流れ星

青山 市村 伊藤 伊藤 大木 太田 河野 川原 西岡 松本

優成 結菜 藍生 未緒 彩香理 璃空 夕依 果南

『一般の部』

◎行き過ぎて踵を返す忘れ花

〈忘れ花〉は〈返り花〉〈狂い咲き〉とも言い、例えば桜やツツジなどの春の花が時節を過ぎて咲く現象を指す冬の季語です。掲句は忘れ花に気づかず一度は通り過ぎて引き返し、しみじみ可憐な花を眺めた作者の実体験が描かれています。季語の本質を裏打ちした作品のようでもあり、今までありそうでなかつた句かも?と注目した作品でした。

◎黙々と轆轤軋ます油照

空は薄曇りで風もない、蒸し暑い工房で一人黙々と轆轤に向かう陶工の姿。〈轆轤軋ます〉の措辞からモノ作りが容易ではない事も察せられ、季語の取り合わせもよく臨場感のある佳句と思います。

◎補聴器に突と飛び込む初音かな

突然、補聴器を通して聴くことのできた鶯の声。〈突と飛び込む〉の7音の調べに「と」の音が3つもあって何やら楽しく威勢のよさを感じます。待ち望んだ春の訪れを瞬時に捉えた作品です。

『小中学生の部』

◎炎天がグラスの氷輝かす

最近、欧米のようにテラスでカフェや軽食楽しむ人が増えてきました。〈炎天〉というスケールの大きな季語からグラスの氷の輝きに焦点を当てた眩い一句に脱帽です。

◎つぼみからふわり飛び出す春の夢

掲句の〈つぼみ〉は「まだ開かない花芽」と「まだ一人前とならない年頃のたとえ」との両方の解釈が成り立つようです。柔軟な感性がとらえた未来の夢はきっと綿毛のようにならぬ大空へはばたくことでしょう。

◎帰り道水着と足が重くなる

水泳を終えてとぼとぼ帰る道。まだうだるような暑さが続いています。〈水着と足が重くなる〉濡れた水着がいつも重くけだるさで家が遠く感じられます。作者のありのままが具体的に表現でき、素晴らしい作品となりました。